

言語の違いを越え、自信をもって活動できる外国人児童の育成 —在籍学級での学習を想定した日本語指導とICTの活用を通して—

特別研修員 多文化共生教育 菅野 俊将 (小学校教諭)

目指す児童像

言語の違いを越え、自信をもって活動できる外国人児童



クラスでも
がんばるぞ!

- ・できることによる自己肯定感
- ・在籍学級での学習に自信

多文化共生社会の基盤

手立て② ICTによる非言語（画像、動画）の活用

日本語を理解したり、自分の考えを表現したりするための一助としての、非言語を用いた指導・支援。画像や動画を見て、児童が視覚的に言葉の意味や言語表現の意図を理解し、活動に取り組むことができるようにする。



本時の活動のモデル映像を視聴し、実際の活動のイメージをつかむ。

今日はおもちゃの作り方をカードに書いていくんだな。映像で見ると分かりやすいな。



実際に制作したときの映像を視聴しながらおもちゃ作りの工程を書く。

動画を見れば、どんなふうにおもちゃを作ったのか思い出せる。動画は巻き戻すことができるから便利だな。

手立て① 在籍学級での学習を想定した学習活動

教科・授業の中で使われる学習言語を習得するための指導・支援。在籍学級での学習に先がけ、1単元を通じた学習を行う（先行学習）。相手の話を理解したり、学習言語を使って自分の考えを表現したりすることができるようにする。



文章全体をどのように組み立てるとよいか話し合い、意見を出し合う。

最初に「何を作るのか」を入れよう。それと、「作り方」の後に「あそび方」を入れないと変な感じがするよ。



おもちゃの作り方をカードに書き出し、それを順序に沿って組み立てる。

実際に作ったときのとは違うけれど、作り方の順序を入れ替えたほうがよいかもかもしれない。

【実践事例】

2年（日本語教室）国語「せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書こう」（光村図書）

活動内容：ビデオ映像を視聴しながらおもちゃ作りの工程をカードに書き、それらを順序に沿って組み合わせて文章全体の構成を考える。

児童の実態

- ・日本語が十分に習得できていない。
- ・日本語が習得できていないことによる不安感を抱き、学級での学習に対して消極的になる。



教師の願い

- ・日本語の習得が不十分であっても、他の日本人児童と共に学級での学習に臨み、自信をもって活動することができるようになってほしい。



県の動向

群馬県多文化共生・共創推進条例（令和3年施行）

「誰一人取り残されることなく、地域社会を構成する一員として受け入れられる社会の実現を図る」

成果

- 在籍学級での学習に備え、平易な言葉の表現や単元の学習に係るキーワードを交えながら児童と対話したことで、ねらいに合った活動に取り組むことができた。
- 本時の活動のモデル映像を示すことで、児童が実際の活動を具体的にイメージしながら学習内容を理解し、活動に取り組むことができた。
- 児童が個々にICT端末を活用することで、必要に応じて言葉の意味を調べたり、前時の活動を確かめたりすることができた。

課題

- 今回は本時の活動のみを示したモデル映像であったが、本単元全部の活動を一括して示したモデル映像を用意し、各時間に該当する部分を視聴させる方法も考えられる。
- 在籍学級との連携を深化させ、双方の学習内容・進度についての情報を共有し、外国人児童が日本人児童と共に学習する機会や環境を、学校全体の課題として今後さらに整備していくことが必要である。